

令和元年6月11日現在

機関番号：33917

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13161

研究課題名（和文）モダニズムの思想圏における保守的文化相対主義の位相 - ゴビノーからマルローまで

研究課題名（英文）Conservative Cultural Relativism in the Modernist Imaginary: From Gobineau to Malraux

研究代表者

吉澤 英樹 (Yoshizawa, Hideki)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：30648415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主に兩次大戦間に隆盛を誇るフランス・モダニズム期の芸術および文学作品、植民地行政、社会思想等に見られる「前衛・革新的態度の中における反動的要素」、また「後衛・保守における前衛的要素」を西欧外部の他者との関係性において解明することを目指した。その結果、この相反する態度は、国内外に共和主義的普遍主義の伝播を試みたフランス第三共和政そのものに内在するある種の矛盾を象徴するものとして、その系譜を思想的に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス革命に由来する人間の普遍性や人権概念の上に基いたフランス共和主義という政体が、植民地拡張主義や拡大したフランスにおける普通教育などの原理に基いた政策の実践を通してあらわになった矛盾というのが、当時のフランス人のメンタリティ自体に深く根を下ろしていたことを思想史・文化史・文学史・美術史という複数のディシプリンの視点から学際的な形で明らかにすることができた。またそれによって、フランス第三共和政研究に新たな視座を提出することができた。

研究成果の概要（英文）：Our research was mainly focused on the reactive and conservative elements found in French-modernist literary works as well as on the innovative elements in French colonial administration, social thought of this era, etc., between the World Wars of early Twenty Centuries. We aimed to elucidate these complicated elements from the relation with the Others outside the Western world. As a result, we could identify its genealogy as a symbol of certain contradictions inherent in the French Third Republic itself, which attempted to propagate their universalism in France metropolitan and their colonies.

研究分野：20世紀フランス語圏文化・文学

キーワード：第三共和政 保守的文化相対主義 前衛と後衛の混在 共和主義の矛盾 反近代主義 アフリカ植民地 国際研究者交流（セネガル）

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

フランスにおける他者理解の系譜については T. Todorov (1989) が、ルネサンス期から 20 世紀後半までのエグゾティシズムの系譜として思想的に再構成する研究を残している。しかし、20 世紀モダニズム思想を専門とする研究代表者が前研究において黒人文化表象が第一次世界大戦後のフランス・モダニズム芸術に与えた影響を分析し、既存のモダン対未開という対立の枠組の再編成を試みた際、伝統的なエグゾティシズムを越えた西欧側からの他者理解に基づいた「未開」とモダニティの結びつきが、20 世紀に入って新たな意味を付与された「プリミティヴィズム」という概念を巡って、前衛的な立場にいる者と反動・後衛的な立場にいる者たちの思考に、共通する形で顕著にみられた。そもそも、前衛芸術におけるプリミティヴィズムは、フランス植民地行政の文脈から生まれてきたものだった。さらにモダニズム期のフランス植民地行政における同化主義から協同主義へのシフトチェンジには 20 世紀後半の文化人類学における文化相対主義の萌芽が垣間見られるように、前衛と反動の区分は容易ではない。このような相反する立場の相互嵌入は、反近代主義におけるモダニティの考察、または「前衛」と「後衛」を巡る議論において、近年着目され始めている。しかし、これらの研究は西洋外部の他者理解に主題を置いたものではない。また、モダニズムにおける反動性の研究はドイツに焦点を当て相反する態度をテクノロジーとロマン主義的美学の同居に帰結させ、ファシズムやナチズムへと至る系譜に集約されがちだった。しかし、この主題は 20 世紀全体、さらには今世紀にまで影響を及ぼしており、もっと広い視点ならびに時間枠において考察すべきである。それゆえ、研究代表者は 19 世紀から 20 世紀にかけて見られる「保守的文化相対主義」というべき概念の内実を検討し、モダニズムの時代における他者理解の態度の一系譜を、申請者と同様に西洋にとっての他者であるアフリカ人海外研究協力者ラファエル・ランバル(セネガル・ジガンシオール大学准教授)と共に解明することを思い立った。

2. 研究の目的

これまでモダニズム思想における反動性や、後衛的・反動的思想におけるモダニティの研究は、20 世紀前半に登場したナチズムやファシズムという特殊事例の解明へと集約させられるきらいがあった。しかし本研究では、このような二項対立に基づかない、相反する態度の同時存在を 19 世紀に生まれ 20 世紀全体を覆う思潮として捉えなおし、後衛における前衛的態度の傾向の一つとして「保守的文化相対主義」という概念を提出することによって、後衛と前衛(保守と革新)という対立構造を越えた新たな世界把握を目指した。

また本研究は、文化人類学・美学・文学・歴史研究等の専門家に協力を得ながら、様々な学知の成果を「保守的文化相対主義」という一つの視点の下、思想史の中に位置付ける点に特色があるが、そこから生まれた共通見解を個別の研究領域に再び適用することによって、モダニズム期の前衛的古典主義(美学・美術史)・植民地行政における協同主義(地域研究・文化人類学)・復員作家のアンチ・モダン(文学・歴史研究)など、これまで互い連関のなさそうな現象を一つの視点の下に見つめ、かつてない形で了解可能なものにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は 20 世紀前半のモダニズムの時代における保守的文化相対主義の位相を解明するため 1850 年代から 1950 年代までのフランス思想史の中にその系譜を位置づけることを目的としており、その主題に該当する基幹となるテキストを選定し、当該テキストの精読・読解を行い、問題系の共有ならびにテキスト間のつながり・系譜作りを行った。当初は植民地における共和主義のあり方に見られる矛盾を考察するため海外研究協力者としてラファエル・ランバル以外に固定した共同研究班のメンバーは設定していなかったが、前研究の研究分担者であった柳沢史明(東京大学助教)と 19 世紀フランス文学における宗教思想を専門とする江島泰子(日本大学教授)の科研費助成プロジェクトと共催で 2018 年 1 月に東京大学でシンポジウムを開催した。そこにおいて、19 世紀の思想史研究・植民地地域研究・美学・文学などディシプリンを横断形での共同研究の祖型が出来上がり、その過程において江島ならびにアルチュール・ゴビノー研究など 19 世紀の反動的な思想を研究する長谷川一年(南山大学法学部教授)を研究分担者に迎え、共同研究としての成果発表に向けて討議を重ね、2019 年 2 月に柳沢史明のプロジェクトと共同で成果論集を刊行した。本研究の目指したところは第三共和政期のフランスに見られる共和主義の原則に照らして散見される矛盾を「保守的文化相対主義」の視点から捉えて分先し、そのモダニズム文化への表出を検証することにあつた。その結果、多様なディシプリンの研究者と協働した関連テキストの読解をへて浮かび上がった問題系の個別事例への反映を分析することによって、保守的文化相対主義の思想圏の画定を目指すことができた。

4. 研究成果

本研究期間中に組織された研究班によって進めた共同研究は、2018 年 1 月の日仏シンポジウムを出発点に、第三共和政期ユダヤ研究の専門家である鈴木重周(横浜国立大学非常勤講師)などメンバーを加え、新たな視点を加えながら討議を重ねた上で修正ならびに加筆を経て、2019 年 2 月に成果論集の形で出版した。そこにおいて以下の 3 つの視点において大きな成果を残すことができた。一つ目は第三共和政が始まった 19 世紀後半において共和国フランスというネイション観と共和国市民像を定位させるための様々な制度が生まれた時期に、共和主義者として伝

統主義者の間に激しい駆け引きがあり、政治思想面などにそれが如実に反映されていることを明らかにした。具体的には、分担者の江島泰子と長谷川一年がユゴー、ミシュレ、ルナンといった19世紀の著名な共和主義者の中に散見される人種主義的残滓に着目することによって、共和主義的な普遍主義的人間観に入り込む前近代的な要素を提示し、研究協力者の鈴木重周はフランコジュダイズムが孕む共和国国民としての立場とユダヤ人としてのアイデンティの錯綜を論じた。二つ目は上記の視点が第三共和政期の植民地アフリカに向けられた本国人たちの視線の中に見られる錯綜として現れることを実証した。具体的には研究代表者の吉澤が植民地の民間企業の社員であった作家たちがアフリカの人々や文化に対して持っていた好意的な視点と彼らの後年の反ユダヤ主義とのねじれた論理的関係を明らかにし、海外研究協力者のラファエル・ランバルはルポライターとしてアフリカを訪れ文章を紡ぐ作家たちに見られる矛盾した視線にある種の保守的な文化相対主義の本質として論じた。三つ目はライシテ（政教分離）の進行していく第三共和政期のアフリカ植民地における植民地行政とカトリック教会と現地住民たちの協働と駆け引きの複雑な実態をその様相を研究協力者の柳沢ならびに砂野幸稔（熊本県立大学）がそれぞれの立場から論じた。彼らの論考によって共和主義的な原則が泥縄式に運用されていく植民地における共和国の矛盾の様相とその原因を歴史的な視点から解明することができた。

次に研究代表者の吉澤は研究期間中、主に共和国エリートの視点から見た保守的文化相対主義についての研究を進め、ドリュ・ラ・ロシェル、アンドレ・マルロー、ポール・モランといった作家についての学会発表ならびに論文執筆という形で成果を発表した。さらに、これらの研究成果を周知させることを目的とし、平成30年度は、1920年代における間大陸的な黒人表象の背後に見られる保守的文化相対主義のアンビヴァレントな様相が実際に描かれた作品として外交官作家ポール・モランが1928年に刊行した短編小説集『黒い魔術』（未知谷、2018）を翻訳し出版した。また同年、依頼を受け東京都庭園美術館「エキゾチック×モダン - アール・デコと異境への眼差し」のカタログに、「保守的文化相対主義」の祭典とも言える1925年にパリで開催されたアール・デコ博ならびに1931年に開催された植民地博と、共和国市民としての植民地住民たちの文化運動であるネグリチュードの関係を考察する記事を寄稿した。翻訳の出版とカタログへの寄稿は、本研究の成果の一端を研究者のコミュニティの外に発信するものであり、今後の波及効果を期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

江島泰子、アンペール・クレリサクにおけるキリストと聖パウロ、そして教会—キリスト教における脱宗教化の一考察—、『国際文化表現学会』第15号、査読あり、2019年3月、pp.1-16

江島泰子、ヴィクトール・ユゴーの死刑廃止論、そしてバダンテール—デリダと考える、(図書収録論文) 査読なし、高桑 和巳編『デリダと死刑を考える』、白水社、2018年、pp.71-97

吉澤英樹、保守的文化相対主義の時代のナショナリズム - ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル(1893-1945)のエグゾティスム論を中心に、査読なし、アカデミア 文学・語学編、104号、2018年 pp. 45-63

吉澤英樹、外交官僚エリートと黒人—ポール・モラン『黒い魔術』における保守的文化相対主義、査読あり、フランス語フランス文学研究、110/111 合併号、2017年、pp. 159-174

吉澤英樹、鏡像と曲芸師 - ドリュ・ラ・ロシェル『若いヨーロッパ人』における模倣と反復の彼岸、査読なし、フランス文学語学研究、36号、2017年、pp. 79-88

吉澤英樹、モダンの表象としての「外交官=作家」像の虚実—米『ヴァニティ・フェア』誌に掲載されたフランス人作家ポール・モランの記事をめぐって、査読なし、成城文藝、237/238 合併号、2016年、pp. 79-62

〔学会発表〕(計6件)

吉澤英樹、マルローとドリュ・ラ・ロシエルのヨーロッパ論再考、マルロー研究会、第三回研究会、2018年6月1日、上智大学(東京都)

吉澤英樹、La Vie quotidienne des écrivains en Afrique : André Demaison et L.-F. Céline、日仏シンポジウム、Afrique, catholicisme, et relativisme culturel : parcours des esprits pré-modernes à l'ère laïque 「アフリカ・カトリシズム・文化相対主義—ライシテの時代におけるプレ-モダンの徴表のゆくえ」、2018年1月27日、東京大学本郷キャンパス(東京都)

長谷川一年、ゴビノーとフィルマン—文明史への二つのアプローチ、日仏シンポジウム、Afrique, catholicisme, et relativisme culturel : parcours des esprits pré-modernes à l'ère laïque 「アフリカ・カトリシズム・文化相対主義—ライシテの時代におけるプレ-モダンの徴表のゆくえ」、2018年1月27日、東京大学本郷キャンパス(東京都)

江島泰子、転換期のディスクール—ライシテとフランスの優位性、日仏シンポジウム、Afrique, catholicisme, et relativisme culturel : parcours des esprits pré-modernes à l'ère laïque 「アフリカ・カトリシズム・文化相対主義—ライシテの時代におけるプレ-モダンの

徴表のゆくえ』、2018年1月27日、東京大学本郷キャンパス（東京都）
吉澤英樹、保守的文化相対主義の時代のナショナリズム - ピエール・ドリュ・ラ・ロシエル（1893-1945）のエグゾティスム論を中心に、招待有り、学習院大学外国語教育研究センター2017年度研究プロジェクト「近代東アジアにおける nationality の問題 -- 「国粋」「国学」をめぐって」、第1回研究会、2017年7月28日、学習院大学（東京都）
吉澤英樹、外交官僚エリートと黒人 - ポール・モラン『黒い魔術』（1928）における保守的文化相対主義、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会研究発表、2016年10月22日、東北大学川内キャンパス（宮城県）

〔図書〕（計2件）

柳沢史明・吉澤英樹・江島泰子（編）『混沌の共和国 - 「文明化の使命」の時代における渡世のディスクール』、ナカニシヤ出版、2019年、289p.
ポール・モラン、黒い魔術、吉澤英樹（訳・解説）未知谷、2018年、296p.

〔その他〕

吉澤英樹、アール・デコの時代のパリの黒人文化運動、展覧会カタログ「エキゾティック×モダン - アール・デコと異境への眼差し」、東京都庭園美術館、依頼有り、2018年10月 pp.154-157

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉澤英樹（YOSHIZAWA Hideki）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：30648415

(2) 研究分担者

江島泰子（ESHIMA Yasuko）
日本大学・法学部・教授
研究者番号：80219261
【平成30年度より】

長谷川一年（HASEGAWA Kazutoshi）
南山大学・法学部・教授
研究者番号：00399049
【平成30年度より】

(3) 海外研究協力者

ラファエル・ランバル（LAMBAL Raphaël）
セネガル国立アサッサン・セック・ジガンシヨール大学・人文学部・准教授

(4) 研究協力者

片山幹生（KATAYAMA Mikio）
早稲田大学・文学部・非常勤講師

鈴木重周（SUZUKI Shigechika）
横浜国立大学・国際戦略推進機構・非常勤講師

砂野幸稔（SUNANO Yukitoshi）
熊本県立大学・文学部・教授

中野芳彦（NAKANO Yoshihiko）
大分県立芸術文化短期大学・国際総合学科・専任講師

野村昌代（NOMURA Masayo）

成城大学・文芸学部・非常勤講師

柳沢史明 (YANAGISAWA Fumiaki)

東京大学大学院・人文社会系研究科・助教

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。